

「地獄のオアシス」

山田
えみこ

人物

阿部寛(49) 刑事

宮島浩(21) 刑事事件犯人

○警察署入口

一台のパトカーが、警察署の入り口に入って来る。

パトカーの中から、手錠を掛けられた宮島浩（21）が、刑事二人に引っ張られて現れる。凶悪な表情。

宮島、乱暴に警察署の中に引き立てられていく。

周囲の警察官や、野次馬の、軽蔑と嫌悪のこもった敵意の目、目、目。

○取調室

宮島が、机の前に座っている。

落ち着かない。

部屋のすみには、警察官が、三人ほど立っている。

阿部寛（26）が、扉を開けて入って来る。

阿部の手には、調書とセカンドバック。阿部、乱暴に椅子を引き、どかりと座

る。

阿部「……」

阿部、宮島を見つめる。

宮島、顔を上げない。

阿部、構わず、調書をひろげ、

阿部「宮島浩。21歳。住所不定、無職」

宮島「……」

阿部「窃盗、31回。そのうち、傷害、器物損壊、20回と11回。被害者は大抵、弱い者。

盗んだ金額は、合計300万」

宮島は、阿部と目を合わせない。

阿部は、かまわず続ける。

阿部「小さい頃から、ごろつきで、近所の女の子にわいせつ行為を行って、それ以来、近所からつまはじき。学校にもいられなくなったお前は、中学に上がると学校にも行かず、ゲームセンターに入り浸る」

宮島「……」

阿部「それから、家を飛び出して、あちこちを転々し、浮浪生活を続けている」

宮島「……」

阿部「小さい頃からの、行動のせいで、どこにも就職できないお前は、窃盗を繰り返す」

宮島「……」

阿部「そして、とうとう、お前は、年取った爺さんを、一人で介護しているこれまた爺さんを手にかけた。息子のほうの爺さんは、全治4か月の重傷で、その間、親のほうの爺さんは、今、ひとりで自宅待機、ケアマネージャーが躍起になって、受け入れ先を探してる」

宮島「……」

阿部「……」

周りの警察官の冷たい目。

阿部「……」

阿部、宮島をじーっと見つめ、そのま
ま、ずうっと凝視し続ける。

取り調べ室の、曇りガラスに木枯らし
が吹き付ける。

阿部「お前の母さんは、シングルマザーで、

ほぼ、お前は、小さい頃からネグレクトだった」

宮島「……」

阿部「ある日、お前は、ちいさな女の子にわいせつ行為を働いた。それから、母親は、ますます家に寄り付かなくなり、家のなかでひとりぼっちだった」

宮島「……」

阿部「人にも憎まれ、どこへ行っても、お前を受け入れてくれるところはなかった。たった、小さな子供の身の上で、お前は、この世に味方もなく、まったく一人で、この世の中にいなければならなかった」

宮島「……」

阿部「家を飛び出しても、お前のいくところには無い。就職しようとしても、過去の噂が付いて来る。どこへ行っても、お前はひとり。育んでくれる母親も、家庭もなく、都会の寒空で、たったひとりで、学校や友達に囲まれた同級生を横目でみながら」

宮島「……」

阿部、宮島を見つめる。出来るだけ長く。表情は、まったく厳しくなく、ほのかに優しさが浮かぶ。

宮島、ひねくれた表情でうつむき、阿部を見ない。

対峙する阿部と、宮島。

突然、阿部が、セカンドバックから取り出したチュッパチャップスを（どん！）と机に叩き置く。

宮島「……？」

阿部「お前が、いつも食べてたチュッパチャップスだ。近所の人に聞いた。小さい頃のお前は、いつも、母親にもらった、唯一のこれを口にくわえていた。母親は、お前を見捨てても、それでも、これだけは与えていた。少ない金のなかで、それでも後ろ髪をひかれる思いがあったのかもしれない」

宮島、チュッパチャップスを見つめ、目を離さない。

阿部「……」

宮島「……」

阿部「水も飲めない、電気の止まった部屋で、熱中症になって、ひからびて死ぬ子供もいるのに、お前には一筋の愛情があった」

阿部、宮島、対峙。

宮島、チュツパチャップスから目を離さない。

（間）

阿部「死んだのは、俺の従妹で、親戚にも助けを求めないその家族は、転覆していった」

宮島「……」

室内は、沈黙。

阿部、静かに、腹にちからを込めて。魂を込めて。

阿部「社会を簡単に諦めるんじゃない」

そして、ゆっくりと、懐から古いお守り袋を取り出し、机に押し付ける。

阿部「これは、俺のばあさんのくれた、大事なお守りだ。取っとけ」

宮島、お守り袋を見つめ、目を見開く。
机上には、一つのお守り。

宮島の顔には、人間らしい表情が戻る。
悲しみ、悔恨が浮かび、強がりが消え、
凶悪な表情が消えていく。

初めての愛が染みたような、久しぶり
のような子供のような表情が浮かぶ。

目が潤み、

宮島「う……うわあー!!」

獣のような声を上げ、引き裂かれるよ
うに、えんえんと泣き続ける。

周りの警察官も感極まって、うつむき、
それぞれの無言の背中に、想いを浮か
べる。

（負けるな、負けるな）

と、言うように。

おわり